
New World

機械 人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New World

【NZコード】

N8931Z

【作者名】

機械 人形

【あらすじ】

二千年前後。それから百年近くたった世界で、平凡な一高校生の新橋紫苑は、父の作ったMMORPG、『New World』をプレイしていた。これは新橋紫苑 シオンのMMORPG内のお話である。キヤッチフレーズは『武器と魔法と能力と』。ゲームの中に入りますが、体は現実、精神はゲームの中、みたいな感じです。

ゲームの中に入つてしまつ。
漫画や小説でよくある話だ。

二千年前後の時代では起こりえないことだつた。

そして、現代。二百年の今は、ゲームの疑似体験が出来る。流石にゲームの中に入ることは出来ないが、それに似た感覚でゲームをすることが出来るのだ。

MMORPG。正式名称Massively Multiplayer Online Role-Playing Game（マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム）は、「多人数同時参加型オンラインRPG」などと訳され、オンラインゲームの一種でコンピューターレンジングをモチーフとしたものを指す。

そして、平凡な一高校生の新橋紫苑しんばし しづのんは、「武器と魔法と能力と」というよくわからぬキャッチフレーズでお馴染みになつて『New World』というゲームをしていた。

これは、仲間とともにモンスターの住み着く最果ての塔の攻略を目指すゲームだ。

最果ての塔は、地下もあるので最下層も楽しむことが出来る。そして、各階は、迷宮のようになつており、一階一階にボス級のモンスターが住み着いているのだ。

『New World』は、MMORPGのランキングでは一万
人しか登録出来ないので圏外だが、やつてみたいと言う人が多いので人気も高い。

そのゲームを作つた会社の社長は、新橋徹。つまり、紫苑の実の父親だ。

元々MMORPGが大好きだつた紫苑は、父が作った『New World』を父に頼まれて発表の十日前からプレイしていた。

発表後から十日間は『New World』しなかつた。ズルい
と思ったからだ。

そして、発表から十一日後。これは、紫苑が久しぶりに『New
World』をプレイした日からのお話だ。

第零章 プロローグ（後書き）

プロローグ、を読んでいただきありがとうございます。
序列最下位の精霊使いがあるので、更新は遅いですが、よろしくお願ひします。
頑張ります。

機械 人形より

第壱話 New World

学校から帰つた俺 新橋紫苑は、服を脱ぐ時間も我慢できなかつたので、制服のまま自室にあるパソコンを起動させた。

何故こんなにも俺が急いでいるのかと言うと、一十日にプレイした『New World』というMMORPGを一刻も早くプレイしたいからだ。

そのゲームが発表されたのは十日前。しかし、このゲームの創作者、新橋徹は俺の実の父親なので、バグがないか調べる役として俺は二十日から発表日までプレイしていたのだ。

パソコンが起動すると、早速ダウンロードしていた『New World』をダブルクリック。そして、始まるまでの間にヘッドホンを付ける。

このヘッドホンには特別な仕掛けはないのだが、このヘッドホンから流れる音波を一定時間脳に流し続けると、精神のみを仮想空間に移動させることができるのだ。

こういうものは世界でも少なく、親父の会社以外では作られていない。他の会社からは、次世代型ゲームと呼ばれている。なかなか良い響きだ。

そして、ゲームが開始されると、俺の意識はゲームの中に吸い込まれていった。

いつの間に此方に来ていたかわからないが、気が付けばゲームの中に入っていた。

何時もこんな感じなのだ。此方に来た感覚がない。瞬間移動で何

処かの街まで移動した、と言われた方がまだ納得できる。

顔とか体型、声などは、現実世界と全く変わらない。変わるところは、腕力等のステータスだ。

「えーと、まずはステータスつと

イメージは確か開けつて念じればよかつたはず。

案の定、開けと願えば、俺の目の前にA4サイズの紙を横に倒した大きさのディスプレイが現れた。

ステータスを開けば、自分の能力とレベル、後はアイテムボックスを開くことが出来る。ログアウトもここから可能だ。

俺は、親父に頼めばチートを使えるが使っているわけではないので、アイテムボックスは空、所持金も初期設定の千円だ。ちなみに通貨は円。ドルにするか迷っていたが、変換が面倒なので円にしたと言っていた。

あの十日間からは、能力とレベルのみ引き継ぐことが出来たので実力 자체は強いが、その他はからっきしだ。

平等にしてほしいと言つたので、あの十日間のプレイした記憶は消去してもらつていい。なので、何処がレベル上げにいいのか、等は全く覚えていない。

能力やレベルを引き継いだら平等にならないんじやないか？ と聞かれたが、それを引き継がなければただ無駄な時間を過ごしだけになつてしまふからそこは引き継がせてもらつた。

だらだらと話をするのはあまり好きじゃないので、また機会があるたびに話すとしよう。

能力とレベルを見るとキチンと引き継がれていたので、まずは武器を買うことにした。

一応言つておくが、レベルは79だ。頑張ったな、二十日前から十日前までの俺。

話を戻すが、千円で買えるものなんてたかがしれている。しかし、ステータスがいくら高くても、初期装備の銅の剣で塔を攻略しに行くなんて、なかなか無謀な挑戦だ。

まあ、無いよりはマシだけど。

そして、レベルが一定以上になり、条件を充たしていると現れるスキルがある。

条件が何かわからないが、レベル75になつた時、俺は一刀流というスキルを手に入れた。

多分これがなかつたら火力がイマイチでクリア出来なかつただろう。

何でかはわからないけど、完全に記憶を消すことが出来なかつたらしく、少しだけなら記憶がある。

逆に此方の世界で俺を知つてゐる人（人獣等も）は多い。

パーティーは四人までと組むことが出来て、最下層のみ時間が足りず仕方無くパーティーを組んでいた俺は、俺以外が全員奴隸で人獣も一人いるパーティーを作つた。

ここでは奴隸を買えるので、パーティーにすることも出来るが、他のプレイヤーとパーティーを組むことが出来るので、みんな後者を選ぶだらう。

俺のときは……まあ、やつてる人が俺だけだつたから全員奴隸だつた。……今になつて考えたら悲しいよな。

とりあえず武器屋に入つて、ザッと剣を見て回つた。

「孤高の紅狼時代の剣が欲しいな……」

「おや、あんたまさか孤高の紅狼かい？」

ポツリと独り言を呴いたら、武器屋の店主、マルミさんが話し掛けってきた。

孤高の紅狼とは二十日前の俺の一つ名で、高レベルになると自動的につくのだ。二つ名の中にある紅は、紅剣という火属性の付いた俺の主要武器だった。

武器の引き継ぎが出来なかつたので、何処にあるのかはわからな

い。

「昔はそう名乗つてました」

「あんたにまた会えるとは嬉しいねえ。ここを覚えていいかい？」

「すいません。記憶喪失になつてしまい此方のことはよく覚えていないんです」

「ここで記憶消去したなんて言つても伝わらないだろ?」

「大丈夫なのかい? まあ、あんたのことだから大丈夫だと思つけど」

「いくら高レベルでも記憶喪失で大丈夫な訳がない。本当は記憶喪失じゃないから大丈夫なんだけど」

「ところでここへは何を探しに来たんだい? 見たことはないけどあんたの剣に敵いそうな武器は置いてないんだけど」

「紅剣が壊れたんだ。金もないからとりあえず五百円で買える範囲で一番良い剣を一本売つてくれないか?」

「剣が壊れたのかい? そうだ、ちょっと待つといってくれないかい?」

「ああ、構わない」

短調に返事をすると、ダッシュで部屋の奥に入つていった。

と、思つたら剣を両手にダッシュで戻つてきた。

「この一本はどうだい? 緋剣と電剣つて言つんだけど、あんたの持つてたやつには敵いそうもないと思うが……どうだい?」

手にとつて重さや使いやすいか見てみる。

多分振り回したら火や氷が出てくると思うからやめておこひへ。

「なかなかいい剣だな。でも高いんじやないのか?」

「いいよ。持つていきな。その代わり、またお金が入つたら来ておくれ」

「ありがとうございます。絶対に返しに来ますから」

そう言つて鞘を腰に差して、武器屋を後にして。

なかなか良い店主だつたな。幸先も良いし、宿を借りたら一狩り行こひが。

とりあえず安い宿を探そうかな。

第壱話 New World (後書き)

お気に入り登録数は……0ですが、ユニークとPVが多くて嬉しいです。

お気に入り登録してもらえるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

この作品を読んでくださった方々、ありがとうございます。
機械 人形より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8931z/>

New World

2011年12月28日22時20分発行